

ある。何事も紙一重で幸、不幸は隣合わせだ。自分の原隊は、前にも述べたが、満州佳木斯一二四部隊で、フィリピンで全滅している。自分は予備士官学校で教育中のため助かった。また、運の強い戦友は、終戦直前の二十年春、本土防衛軍に転属になり本土の土を踏み、内地で終戦を迎えた者もいた。だが、当初千三百人だった隊員のうち、生きていた者は、転属者たちを含めても、百八人とわずか九パーセントの生存率だった。

残り少ない人生は、戦友の冥福を祈り大切に生きていきたい。

忘れられない抑留生活

岡山県 三宅 正人

一 出生から入隊

1 岡山県井原市東江原町二六九五番地

明治四十五年二月二十八日生

昭和五年三月 矢掛中学校五年卒業

2 不況時にて就職場所なく擦糸工場を始める。父母弟妹五人暮らし。

二 ソ連軍侵攻前

1 満州国新京市厚生会本部勤務中、二十年五月十七日、現地召集で白城子北方のソ連国境近くへ入隊、銃帯及び軍服等支給される。

2 七月ころ、旅順へ引揚げ奉天都市防衛に当たる。
三 ソ連軍侵攻

参戦の報に接し、奉天市街の道路を掘り戦車溝を作る。

四 終戦

1 八月十五日、東北大学講堂に集合、詔勅を聞く。
ラジオの雑音多く聴き取れず。戦争に負けたのだと後から聞かされ皆一度にがっかり。

2 数日後ソ連軍進攻、武装解除される。部隊編成は北支より病人部隊として奉天移動してきた部隊と一緒でした。

3 ソ連の命により奉天郊外の満人部落へ移動し、し

ばらく滞在する。

五 シベリア抑留地への旅

1 ソ連軍の命により、皇姑屯の駅より千五百人ほどの人員で三十両ほどの貨車に乗り黒河まで輸送される。監視兵二名が各貨車の屋根に銃を肩にして上っている。奉天を出るときは暑かったが、大粒のみぞれが降り出す。

2 ブラゴエシチェンスクという駅で、貨車の中の高梁の袋の上に乗り込んで列車は走り出す。数日してバイカル湖が見えてきた。しばらく停車と伝令が来る。昼食の配給があるとのこと。飯盒を持って湖岸に並ぶ。えんどう豆を炊いた物を一杯くれた。とても美味しかった。白樺の林を後ろに西へ列車は走る。出発して一カ月ほどでカザフ共和国へ。

3 ジスガスカン収容所に到着

零下三〇度の寒さが続く。朝食と夕食は高梁のスープ、昼食は黒パン三百グラム、栄養失調で多数の死者が出る。

六 抑留地の生活

1 作業部隊が決まり、煉瓦工場行きとなる。炊事係となり高梁と馬鈴薯などを受取りに工場へ行く。

2 シラミ発生で衣服の熱気消費で全滅し楽になる。

3 千五百人程度収容されていた。

七 労 役

1 ジスガスカン煉瓦工場で一年ほどして、湖の見えるバルハシに着く。砂漠地帯と違って、煙突の見える町に住宅があり産業都市である。

2 バルハシ銅精錬所内の作業他、大工仕事、左官仕事などいろいろと回される。

3 ノルマ達成時は黒パンの量が多くなり、達成できないときは小さくなる。

八 抑留者の統制管理

1 身体検査により労役に就くか否か基準にあり。

2 点呼作業場の往復は監視付きながら異状なし。

3 衣服等は満州よりソ連が持ち帰った軍服支給。厳寒時防寒衣着用。

4 食事類、高梁、黒パン、野菜、一日三回。空腹時、クローバの根を掘り茹でて食す。

5 零下三五度以下になると休み。囲碁などで過ごした。

6 平屋建てバラック、採暖はペーチカ、幅二メートル程度の木の寝台。

7 民主化教育はナホトカで二、三回。

九 抑留中の生活と極限状態における意識

1 満州へ残した妻と子供の安否を気づかい、生きて帰ることのみ念願する。

2 空腹時、何も食べなくても三十日くらいは生きて行けると我慢すること。

3 暖かくなり、ダモイを予測して元気で帰ること。

十 帰国

1 バルハシで帰還の知らせを受ける。

2 貨車に乗りオムスク、トムスクを通り東へ約一カ月ナホトカに着く。

3 四五日後、遠州丸に乗船。

4 船内は平穩。

5 舞鶴港へ上陸、九月十日ごろと思う。

十一 帰国後の生活

前の勤務地が新京なので仕事なく、老母、妻、子供と四人暮らし、米の配給の代わりに砂糖などにて芋と交換して、生活は楽ではなかった。

アングレンの思い出

石川県 吉野 藤吉

(旧姓 高山)

若い血潮に燃えて七ツ釦の予科練へ。昭和十九年十二月一日、乙種二十四期生として松山航空隊に入隊。南国とはいえ身を切るような海風で初めて凍傷になる。翌年三月、敵グラマンの急襲を受け、目前五メートルほどの所に二キロ爆弾が落ちたが不発弾で命拾い。松山から倉敷に移動。六月朝鮮へ転属命令。

忘れもしない六月十六日門司出港、幾許もなく黄昏迫るころ、六連沖で船の後部触雷と爆雷誘爆により、「アッ」という間に轟沈。私は戦友と二人上甲板にいて、爆風で吹き飛ばされ腰を強打して海へ「ドボン」。薄い板切れにすがって二時間ほど漂流、幸い通りがか